

第1章 少子高齢化や無縁社会など現代の課題が儀式文化 にあたる影響や将来の動向についての研究 - 結婚式 -

1. 「結婚式」新聞記事検索 調査報告

石井 研士（國學院大學）

調査対象：朝日新聞 読売新聞 毎日新聞（全国・東京／朝夕刊）
対象期間：1945 - 1989年（昭和20 - 昭和64／平成元年）
調査方法：キーワード「結婚式」で検索。著名人の結婚式および事件・事故報道等を除く
記事を収集・分析。

※入手記事数／ヒット件数

朝日新聞 182／515件 読売新聞 165／3760件 毎日新聞 135／622件

【概要】結婚式場の動向に注目してみると…

昭和21年（1946）1月20日、明治神宮ではじめて一般の結婚式（2組）が行なわれ、22年11月、明治記念館が開館。一般には、24年（1949）に至っても、仲人と親類だけの自宅挙式が多かった。

昭和25 - 34年（1950年代）は、概ね簡素な（費用を抑えた）結婚式が“近代的”“合理的”あるいは若者らしいと好まれ、招待者数も20人程度が一般的である。昭和26（1951）年4月、「新宿生活館」完成。「結婚簡素化のモデルにしよう」という構想で、結婚式場が設けられる。「新宿生活館」は人気の式場となり、昭和30年代後半（1960 - 1964年）には予約抽選会が必要となるほどの盛況ぶりだったが、昭和40年代半ば（1960年代末）にかげりを見せる。

大きなうねりは、昭和40年代（1965 - 74）にある。結婚式場経営が全国に普及・拡大するなか、花嫁の「お色直し」が始まり、ケーキ入刀が定番化する。戦後ベビーブーム生まれが適齢期に入り、空前の結婚ラッシュ（昭和42年）を迎えると、披露宴の規模が拡大（招待者数40～50人が6割以上）。“簡素”よりも“デラックス”が好まれるようになる。ただし、「豪華なムードでできるだけ安く」というニーズ。これに応えたのが、この頃続々誕生した官公庁の外郭団体系の結婚式場である。デラックスな設備と安い費用がうけて、民間式場の転廃業を促すことになった。一時、会費制の結婚式が流行するが、定着しなかった。

昭和50年代前半（1975 - 1979年）になると、花婿もお色直しするようになる。結婚費

用は年々増加していくも、インフレを反映して公共・公立式場に人気があった。この頃、結婚式は“無難に”“世間並みに”と型通りして、新婚旅行は豪華に…という若者が増えたといわれるようになる。披露宴の規模が大きくなり、ショーアップされながら、「式」は形骸化した。

昭和 50 - 60 年代（1980 - 1989 年）には、区立の公営結婚式場の閉鎖があいつぐ。適齢期人口の減少によって結婚式そのものが少なくなり、かつ“世間並みに”の豪華結婚式がエスカレートしたことで、利用者が激減したためである。公営式場の閉鎖と玉姫殿グループの躍進は対照的である。尚、ゴンドラに乗る新郎新婦の姿は、結婚予備軍の披露宴離れ（女子学生・OLの4人に1人が「披露宴はやりたくない」）を引き起こし、平成の世を迎えることになる。

【1945 - 1949 年】（昭和 20 - 24 年）

仲人と親類だけでの自宅挙式が多い デパートの結婚式場も盛況

- ◆1946 年：参列者数 20 - 30 人、デパート 600 - 700 円、料理店 1,500 - 2,000 円程度
- ◆1949 年：デパートでは 1 万 5,000 円、都内の某ホテルでは 3 - 4 万円のものが多い。

記事抜粋：1946 年 1 月 21 日付（読売 005：別表の媒体種別と記事番号を示す。以下、同様。）

1946 年 1 月 20 日、（神道指令後はじめて）明治神宮で結婚式を行う（2 組挙式）
（補足：1947 年 11 月 「明治記念館」開館、結婚式斎行開始）

記事抜粋：1946 年 10 月 22 日付（読売 009）

結婚式場と貸衣装のお値段

- デパート 挙式料 35 - 50 円、室代 30 - 50 円、茶菓 5 - 3 円、
美粧着付（かつら共）85 - 160 円、写真 2 組 140 - 160 円
- 料理店 挙式料 60 - 100 円、飲食代 45 - 70 円、
美粧着付 133 - 200 円、写真 2 組 140 - 400 円

総費用（20 - 30 人）デパートで 600 - 700 円、料理店で 1,500 - 2,000 円程度

- 東京大神宮挙式料 鶴（奏楽付）150 円、亀 100 円
- 貸衣装 留袖 64 - 164 円、振袖^(ママ) 356 - 76 円、モーニング 48 - 100 円

記事抜粋：1949 年 9 月 19 日付（朝日 009）

秋…結婚シーズンがやって来た。仲人と親類だけでの自宅挙式が、今秋もやはり多い。デパートの結婚式場あたりでは、多い日は 2000 組ぐらいが目白押し
デパートでは 1 万 5,000 円、都内の某ホテルでは 3 - 4 万円のものが多い。

花嫁支度は中級の家具調度でも一組 4 万 2 - 3,000 円はかかる。

<MEMO>

明治 33 (1900) 年、東京日比谷大神宮の拝殿で初めて神前結婚式が行われる。

大正期、自宅結婚が減り、宴会は料理屋かホテルで行うようになり、新婚旅行も一般化。

関東大震災 (大正 12) により日比谷大神宮が焼失。帝国ホテルは、伊邪那岐命、伊邪那美命をホテル内に祀り、挙式から披露宴まですべてホテルの中で行う形式を作り上げる。

昭和 13 年、目黒雅叙園 (昭和 6 年開店) が結婚式場の一貫システムを導入、美容、写真、衣裳などの施設を整えた総合結婚式場の先駆けとなる。

昭和 15 年、日中事変 (昭和 15) 後、婚礼も質素に行うのが風潮となった。

【1950 - 1954 年】 (昭和 25 - 29 年)

派手で盛大な挙式は減少。復古調の波、大安が選ばれるようになる

- ◆新宿生活館が誕生。(1951 年、結婚簡素化のモデルにしようと構想)
- ◆中流層の結婚費用は、参列者 20 人平均として 2-3 万円から 4-5 万円。
- ◆花嫁衣装は純日本風が断然多い (洋風は過去の流行)。半数が貸衣装。
- ◆大安仏滅の縁起をかつぐ傾向が顕著に多くなる。
- ◆式場申込が、両親や仲人から当事者に移行。
- ◆新宿生活館、結婚シーズンの秋には超満員の予約 (1954 年)

記事抜粋 : 1951 年 3 月 27 日付 (毎日 006)

都民生活に関係のある施設を備えた『都立新宿生活館』が 4 月に完成

「新宿生活館」に三越の都結婚相談所を移し、結婚式場を設ける。

挙式料は一切を含めて 500 円、披露宴会費は茶菓程度で 1 人前 100 円、

結婚簡素化のモデルにしようという構想。

記事抜粋 : 1952 年 9 月 15 日付 (毎日 013)

一晚の披露宴に 100 万、200 万とかけたところのような派手な挙式も最近は一体に地味になり、中流どころの費用は 20 人平均として大半 2 - 3 万から 4 - 5 万止まり。

なかには 50 - 60 人の客で 15 万、20 万というものもあるが、これなどは主に実業家、商人、医者といったところで、一般サラリーマンは至極堅実だという。

花嫁の式服も半分は貸衣装で、あとは親類、姉妹のお古で間に合わせ、新調は 20 人に 1 人ぐらいというところ。そのくせ振そで、高島田の純日本風が断然多く、これもひところ流行ったような洋風は一割にも足りない復古ぶりである。

記事抜粋 : 1953 年 6 月 22 日付 (毎日 025)

最近の傾向で面白いのは、復古調の波に乗ってかどうか、大安仏滅の縁起をかつぐ人た

ちが目立って多くなって来ていることです。別に信じているわけではないけれども、一生に一度のことなのだから、出来るだけいい条件でやりたいというわけで、大安の日を選ぶらしいのですが、当事者二人の相談で、仲良く決めるのも増えてきています。

式場の申込にも両親や仲人が来るよりも、二人そろって出頭に及ぶのが目立ち、申込表の具合を見ながらきめて行きます。これは少し前までは見られなかったほほえましい風景です。披露宴も名士や会社関係の人達を数百名も招待して盛大に行うのと、十数名のごく親しい友人だけで行うのとがありますが、物すごく盛大なのは最近少なくなってきているので、大変目立ちます。

記事抜粋：1954年9月17日付（毎日037）

各式場とも昨年に比べて今年は予約が早く、すでに大安、友引、先勝などの吉日は満員の盛況です。費用は、ほとんど昨年と同様。

現在までの予約者のうち、特に簡素にしたいという例は割合に少ないようですが、一般に挙式、記念写真衣装、披露宴など従来どおりの型はくずさないとしても、披露宴の料理を1人前1,000円から700円にするというように、中の段階で経済的に済ませるといった傾向になっています。

（1万円以内ですむ）新宿生活館の場合、特に今秋は超満員の予約で、吉日どころか普通の日も12月初旬まではぎっしり。

各式場平均費用：

挙式料＝神前結婚が大多数。参列者10人まで500円、20人まで700円、20人以上1,000円、参列者は20人から30人が最も多いよう。松、竹、梅などの段階があつて奏楽、舞などが入ると2,000円、3,000円になるところもあります。

記念写真＝八切3枚一組1,800円（焼増は1枚200円）、四切3,000円（焼増1枚300円）。

八切で新郎新婦と親族の2種類とる場合が圧倒的。

美容など＝着付は、かつら、化粧着付、引揚支度などを含み、打掛の場合は2,300円、振そでは2,000円、洋装の場合は1,300円から1,800円。

貸衣装は振そで2,000円から7,000 - 8,000円くらいまで、洋装が3,000円から6,000円、モーニングは1,000円から1,500円。打掛を用いる人は全体の3割くらい。

このほか花束が800円から1,000円、招待状が1部40 - 50円。

披露宴＝料理は1人前700円から2,000 - 3,000円まで、神前結婚が多いので1,000円から1,500円くらいの日本料理が多いようです。また引物として折詰とカツオ節、和洋菓子、ふる敷などをつけますが、折詰は700 - 800円から1,500円、ふる敷100円、菓子200 - 300円から500円、カツオ節400 - 500円程度で、最近は折詰だけとか菓子折だけというようにどちらか一品の場合が多くなっています。

全体の経費＝平均20人の参列者があるとして3万5,000円から4 - 5万円が一般的です。

【1955 - 1959 年】（昭和 30 - 34 年）

神武以来の結婚ブーム 式の費用はほどほどが“近代的”

- ◆春から初夏の結婚式が増える（1955 年、「最近の特徴」といわれる）
- ◆簡素な（費用を抑えた）結婚式＝近代的・合理的 …「若い」「すがすがしい」と推奨
- ◆1956 年は申（去る）年ながら式場は超満員⇒1957 年、結婚式ブーム
- ◆式の費用はほどほど、5 - 7 万円クラス（列席者 20 - 30 人）がもっとも多い（1957）
- ◆1950 年代末には結婚式が派手になる傾向への批判もみえる

記事抜粋：1955 年 5 月 25 日付（朝日 027）

春や初夏にこうも結婚式が多くなったのは最近の特徴。

結婚シーズンというと秋晴れの 10、11 月に集中された感だったが、今年は 3 月下旬以降も多く、ことに 5 月は大きな式場となると終日二十数組の盛況。

どこの式場も新郎新婦いずれも 3 分の 2 は貸衣装でならぶ。

新婦は真白なウエディングドレスを着る数が振そでに接近してきた。

披露宴の費用は、明治記念館で「だいたい 4 万円前後」。

新宿生活館では、挙式料も含めて平均 9,788 円。

記事抜粋：1956 年 3 月 17 日付（読売 288）

都立新宿生活館・葛飾生活館では、結婚式に多額の費用をかけるより、出来るだけ簡素にして浮いた分で電気洗たく機を買ったりして家事の合理化をはかってほしいと「1 万円で結婚式から新婚旅行まで」を推奨しています。

そして喜ばしいことに、簡素な結婚式を挙げる人が年々増えて、ことしは世間で騒がれているサル年の影響など全然なく、同館の申込みは 5 月半ばまで満員という有様だそうです。

記事抜粋：1957 年 8 月 13 日付（毎日 072）

都内の結婚式場は秋の結婚シーズンを前に申込みが殺到、10、11 月はすでに満員になったところが多い。このブームは昨年がサル年だったため、縁起をかついでことしにのびした組が多いのとサラリーマンの生活が安定してきたのがおもな原因だとされている。

記事抜粋：1957 年 10 月 4 日付（毎日 073）

経済の落ち着きとともに、結婚式もある程度復古調になっているというものの、それはいうなれば衣装についてだけ、披露宴などはむしろ大部分簡素化の方向にある。東京都内の一流結婚式場でも、挙式から写真、新婚旅行出発のハイヤー代まで一切含めて 5 - 7 万円クラス（列席者 20 - 30 人）がもっとも多いという。

付合いを第一とする親の見栄より“結婚式にバカな金を使うくらいなら、生活設計に使っ

た方がよい”という現実的な若者の意見が勝って、式の費用もほどほどということになる。

「ともかく最近の結婚式をみると、結婚衣装がだんだんりっぱになってきているほかは披露など戦前のようにいたずらに親の関係者が多数くるようなのはあまりみられず、当人たち本位に、親類と職場の先輩、友人代表とせいぜい 27 - 28 人ぐらいで、非常に和気あいあいとしたものが多い。これは望ましい傾向だ」(明治記念館長)

記事抜粋：1958 年 4 月 5 日付 (朝日 046)

去年 (1957) は一昨年のサル (去る) 年のあとをうけて、神武以来の結婚ブームといわれたが、今年もそれにおとらずさかんようだ。

花嫁の晴着は和服が圧倒的で、ひところ喜ばれたウエディングドレスは影をうすめた感じ。

結婚式の費用は、公立式場だと、料理、引出物、酒一本平均として 20 人分で 3 万円くらい。

私設の式場は多少値がはるようで、20 人で 4、5 万というところが相場。

新宿生活館では、披露宴をふくめて式代一切 1 万円から 1 万 5,000 円程度が大部分。

記事抜粋：1959 年 2 月 15 日付 (読売 521)

結婚式やそのしたくを派手にしようとする傾向が再び強くなりつつある。デパートなどでも 20 万円、30 万円もする花嫁衣装がどんどん売れていくそうである。式も本人同士でなく、家と家との結びつきのような形式ばった豪華なものが多くなった。生活に余裕が出てきたからであろうか、再び古い意識や形式にとらわれていくのはどうしたことであろうか。

記事抜粋：1959 年 8 月 5 日付 (毎日 112)

一般に昨年にくらべて真夏の結婚式はいくらかふえているようだ。ほとんどの式場係の人が「ご成婚ブームの余波のためではない」といっている。真夏に挙式する理由には①いつだって都合のいいときという組、②「季節の理由だけで秋まで延ばすのは無意味だ、婚約した以上、一日も早く結婚生活をはじめたいのが当然で、結婚シーズンという考えがおかしい」、③9 月に地方へ転勤するので、④急に海外出張がきまり、行く前に挙式しておきたい、⑤中年組の中には、若い人ばかりで式場があふれているような中で挙式したくない、⑥夏は服装や料理を簡略にするので、経費が少なくてすむ、⑦妹の結婚がつかえているからといった家庭の事情 など

記事抜粋：1959 年 10 月 4 日付 (毎日 113)

「当人、仲人を除いて 15 - 16 人の客を招き 2 万円前後で挙式、披露宴ともすませるのがうち (=新宿生活館) では普通でしょう。ハダな披露宴をやる人は帝国ホテルや東京会館に行くようです。だからうちでやるのは開館以来同じ生活水準で結婚に対して質素な考えを持つ人たちばかりです」(中川福祉係長)

【1960 - 1964 年】（昭和 35 - 39 年）

年々派手になる傾向 “デラックス化” 都立・区立の式場も人気

- ◆都立新宿生活館ほか、港区立麻布会館や大田区民会館など、区立の式場も盛況
- ◆結婚式は年々派手になっていく傾向、嫁入り支度もデラックス化

記事抜粋：1960 年 2 月 1 日付（毎日 118）

「式から披露宴までひっくるめて一人前 1,000 円ですませましょう」という新宿生活館の実質主義が若い人にカンゲイされて、このところ同館の式場はたいへんな盛況。ひところは吉日を選ぶために徹夜組まで現われた。そこで昨年 4 月から抽選制に切替え、3 ヶ月前に受け付けている。

記事抜粋：1960 年 8 月 2 日付（朝日 070）

170 組が新宿生活館に集まって秋の結婚式の日取りを抽選し合った。どの婚約者も 10 月挙式を望むので“事態収拾”の意味から、日取りをくじ引きで決めることになった。

記事抜粋：1961 年 6 月 2 日付（朝日 079）

新宿生活館は 1 日、9 月から 12 月までの挙式申し込みを受け付けた。（申込み総数 210 組）同館ではこれまで 2 ヶ月先の分まで受け付けていたが、月に 150 組しかこなせないところに、毎月平均 200 組くらいも押しかけ、希望の日に関わらない人も多いため“新生活のスタートからケチがついては気の毒だ”と“長期予約”を受け付け、希望者全部が式を挙げられるようにしたのだという。

記事抜粋：1961 年 11 月 5 日付（読売 849）

秋の大安吉日とあって東京都内の各結婚式場はどこも超満員。まず帝国ホテルが 1 組 45 万円から最高 157 万円という**デラックス版**が 5 組、ホテル・ニュージャパンは作家富田常雄さんの令息の結婚式を含め 10 組、新築のパレス・ホテルも 8 組、両ホテルとも 30 数万円から 100 万円台という。大どころの明治記念館はこの秋の結婚ラッシュにそなえ 3300 ㎡を増築、調理場などオートメ化して 44 組、お客 2 千数百人がさつとう。朝 8 時過ぎから夜 7 時過ぎまでの“フル運転” 東京会館、東京大神宮も 30 組で夜 7 時にやっと全スケジュールが終わるというありさま。

庶民の**新宿生活館**では 6 組、約 200 人、1 組しめて 3 万円という簡素さ。

記事抜粋：1963 年 4 月 25 日付（朝日 093）

結婚シーズンのこのごろ、大安吉日にはどこの式場も押すな押すな、**結婚式は年々派手になっていく傾向**ですし、**嫁入り支度もデラックス化**しつつあるようです。

【1965 - 1969 年】（昭和 40 - 44 年）

“結婚式屋（結婚式場経営）”の普及・拡大 お色直し 参列者数増

- ◆ 仏滅を避ける傾向が強まる
- ◆ 結婚式産業の普及、全国に拡大
- ◆ 大手の式場経営者による結婚式場連絡協議会が設立される（1967 年 10 月）
- ◆ 空前の結婚ラッシュ（1967 年秋）——戦後ベビーブーム生まれが適齢期に入る
- ◆ 結婚式場業界の“戦国時代”（1969 年）——生活館での挙式減少、サービス競争激化

記事抜粋：1965 年 4 月 18 日付（読売 1323）

ついさいきん、科学技術庁がまとめた全国 3000 人の母親を対象とする科学知識世論調査では、「結婚式、葬式のさい、大安、仏滅、友引などの日のよしあしを考えるか」という質問に対し「考える」と答えた母親は、なんと 81%という大多数。「全然気にしない」ものは、17%に過ぎなかった。

「私たちが結婚したころより、ひどくなった感じですね。当時も日のよしあしを気にする人は多かったけれど、式場が少なかったから、そんな気長なことっている余裕はない。それに、式も簡素だったし、親しいものだけを集めて、さっさとやったもんです。経済の繁栄で式場がふえ、式もデラックスになるにつれて、かえって因習が復活したんじゃないかしら…」とは、I さん（商社マン、40 歳）のいつわらぬ感想だ。

明治記念館は、数年前から仏滅に休業するようになった。仏滅の日はさっぱり申し込みがなく、思い切ってこの日を休日としたもの。

記事抜粋：1965 年 5 月 3 日付（読売 1328）

東京では昭和 30 年ごろから、また地方では 2 年ほど前から“結婚式屋”という新しいサービス事業が、急速に普及しはじめた。これまで、縁結びは、神社やお寺や教会がもっぱら引きうけてきたが、披露宴や服装の準備など、不便な点が多かった。その間げきをねらったのが、この新企業で、日本だけの珍しい商売だ。

それだけに都内では早くも競争激化のキザシがあるものの、地方ではまだまだこれから。

特色：第 1 の特色は、10 を超える業種の多角経営体であること。

- ① 施設賃貸業、② 衣装賃貸業、③ 美容業、④ 着付け役務業、⑤ 儀式役務業、⑥ 写真撮影業、⑦ 花屋（飾り花と手持ち花束）、⑧ 飲食業、⑨ 菓子、アイスクリーム製造販売業、⑩ 小売業（結納、引出物、記念品、あいさつ回り品）、⑪ 印刷業（招待状、式次表、あいさつ、披露宴次第の印刷）、⑫ 旅行あっせん業（新婚旅行と披露宴出席者のバスなどのあっせん）など

ほとんどのところは、飲み物から衣装、引出物まで、持ち込み禁止と徹底している。

「着のみ着のままで朝くれば、午後には結婚ができる」という便利さだが、逆に、客にとっては、用意した衣装さえことわられたり、何もかもを買わされてしまうマイナスもある。

第2の特色は、現金前払いが原則であること。慶事だけに、半数は一週間ほど前にとどけてくれるし、挙式の翌日まで支払いをのぼした客はどこをきいても1件もなかった。

第3の特色は、人気ののれば効果が長いという点。かつて披露宴に招かれた客の一人として出席したことがあるなど、クチコミで人気が高まっていく。

採算：この経営には、弱点も多いようである。その証拠に、売上高に対する純利益率が5%前後しかあがっていないところが多いのだ。償却などを大幅にとっているかもしれないが、(略)原価管理になれたあるホテルは、結婚式部門だけで20%以上の純利益をあげている。繁盛しているとみられる場合でも、収益性の低い例が多いのは、一面この商売のむずかしさを物語っている。いろいろな業種の総合体であるために、利益管理や原価管理が、非常に複雑になるということだ。ホテルやスーパーマーケットの計数管理方式と同じ程度の精密さが必要である。

しかも季節性の激しさから、閑散期の売り上げ減少という基本的な弱点がある。春秋は超満員でも、仏滅の日のほか6-9月は皆無に近いところが多い。12-2月という第二の閑散期がある。つまり年間半分はかせぎがないのである。

価格面での大衆商法に徹しきるか、あるいは一般宴会やダンスパーティー、一般グリラといった乗り切り策が、活発な理由もここにある。したがって結婚式場純粹派は前者に、飲食業兼営型は後者に、対策重点があるようだ。

形態：第1グループ 寺社みずからがやっているもの

もっとも本格的なのは、明治記念館(青山)である。昭和22年に、市村清氏(リコー社長)の指導でスタート、現在年間5500組をさばっている。式場2カ所、従業員数直属227人、委託200人、合わせて400人を超す大所帯。明治神宮の権威と、明治天皇、昭憲皇太后ゆかりの建物(6600㎡)3万3000㎡の広大な庭園などが特徴。同類に出雲大社東京分祠(麻布)、日枝神社(赤坂山王)、神田明神(神田)、築地本願寺(築地)などがある。

第2グループ 結婚式場専門派

第1グループに、まず競争をいどんだのが第2グループの結婚式場専門派。高級なところでは、見合い写真で有名な東条会館(半蔵門)。大衆向きでは、年間2万組を超す挙式を消化するマンモス式場、三福会館(大久保)。その中間をゆくのが、富士観会館(二子玉川)、芙蓉会館(新宿)、新日本会館(田町)、光雲閣(代官山)など数十軒。いずれも専門として価格、またはサービスのよさを売り物にしており、大部分が高層ビル。同時に、一般の宴会も兼業して、結婚式場経営のオーソドックスな形である。経営者ないし出資者は、不動産業や観光業出身が多い。

第3グループ 飲食店経営からの進出派

中華料理の東天紅（上野不忍池）や大庭園の椿山荘（目白）、八芳園（白金）、雅叙園（目黒）、日本閣（東中野）などが有名どころである。料理や大宴会で名を売っているだけに年間2000組を越す店もあって、第2グループとならぶ実績を誇っている。

第4グループ ホテルの兼業

高級といえばホテルでの挙式、あるいは披露宴というのが社会常識。ただし伝統のある帝国ホテル、建物にいわれのある赤坂プリンス、高輪プリンスとか、大衆商法の東京観光ホテル（品川）といったところ。数では第2、第3グループの敵ではないものの、重要な売上項目の一つで、目下開拓に懸命。

第5グループ 団体が、その所属メンバーの福利対策として行う結婚式場

学士会館、私学会館などの大学派。半蔵門会館（警察）や麹町荘（東電）健保会館など純共済派。さらに、日本青年館、厚生年金会館、主婦会館のように一般開放型ないしアルバイト型もある。

第6グループ 低料金ラインだけをねらう区立の生活館

新宿、葛飾、太田など。

相場：一組当たりの売り上げは、高輪プリンスホテルが平均27万円、東条会館20万円、明治記念館、東京観光会館各15万円、三福会館10万円未満といった客層分布になっている。

記事抜粋：1965年10月8日付（朝日133）

むかしの結婚式の形式をぶちこわすのは賛成だが、それに代って、ヘンな形式が、新しい紋切型になりかかっている。

記事抜粋：1965年10月11日付（朝日134）

「お色直し」は、現代におけるステータス・シンボル（社会的地位の象徴）化している。ウエディング・ケーキにナイフをいれる。乾杯、そのお色直しの間に食事をすませて、デザート・コースのところから式辞祝辞を始めるというのが、このごろのしきたりで、これはまア、大体のコースのようである。

記事抜粋：1967年9月30日付（毎日189）

この秋は空前の結婚ラッシュ——厚生省の推定では10月から年末までに、約40万組（昨年より10%増）の新カップルが誕生する。戦後のベビーブームに生まれた人たちが適齢期にはいったため、ラッシュの皮切りは日曜日と大安が重なる10月1日。東京都内はじめ、各地の結婚式場は軒並み満員。東京駅だけでもざっと3000組がハネムーンに出発、京都—九州間には、この日から新婚旅行専用の“お熱い列車”「ことぶき号」も運転される。

「来年はサル年なので“去る”に通じるのをきらってとくにこの秋に集中したようです。

10月1日の44組はどなたもことしのはじめに申込みいただいた方々です」(明治記念館)

記事抜粋：1967年10月18日付(朝日166)

結婚ブーム——都内には結婚式場が雨後のタケノコのように新設され、今月をはじめにはついに大手の式場経営者が結婚式場連絡協議会をつくった。

都内の結婚式場は約130カ所、このうち30カ所は昨年から今年にかけてできたもの。宴会場や料理屋が拡張したり転業したり、従業員の共済組合などが設立したもの、これに公立などがある。これから来春にかけてオープンする式場は約20カ所。料理屋からの転業が多いが、公立でもデラックスなのがお目見えする。

記事抜粋：1967年11月21日付(読売1716)

15組が合同で挙式する、やまのべもとこウエディング研究室主宰「花と音楽の幻想結婚式」というのが20日午後、東京プリンスホテルで行われた。これは同研究室が定型のない新しい芸術結婚式を目標に、集団による印象的な挙式の第1回として催したもの。

記事抜粋：1968年2月13日付(読売1741)

都内の結婚式場の予約状況、費用などが一目でわかる「結婚式場相談センター」(中央区八丁堀)が評判を呼んでいる。昨年11月に発足したものだが、3ヵ月間に1520件の相談があり、式場予約も420件という盛況ぶり。

これら利用者の相談から、最近の結婚プランの現実をのぞいてみると——

◇招待者数 40人から50人が全体の6割以上を占める(40人32%、50人28%、30人18%、20人12%、60人12%)

◇披露宴の費用 1,2年前にいわれていた平均15万円を大幅にアップ(20万円前後44%、15万円前後28%、30万円前後22%、40万円以上6%)

◇式場種類別の予約 ホテルという希望が増えているが、統計では〇〇会館など専門式場が多く、希望と現実の相違を示している(専門式場68%、ホテル18%、公共式場14%)

⇒参照：(毎日191)1968年2月18日付 婦人・子供：レデイス百科=結婚式場の相談所

記事抜粋：1968年2月29日付(毎日192)

“生活館方式”というムダをはぶいた結婚式で全国にその名を知られる新宿区立生活館(昭和40年4月に都から新宿区に移管)で、挙式1万5000組の記念式が行われた。

既に3-4月は土、日曜や日がらのよい日は満員、5-6月は比較的あいているという。ある職員の話では2,3年前までは申し込みが殺到して抽選になることが多かったが、民間の式場がふえ、挙式も派手になってきたせいも、最近申込みがちょっと落ちてきているという。

記事抜粋：1968年3月9日付(読売1751)

最近は変わった式を挙げてみたいというカップルも多い。そこをねらってさかんに売り出されているのが“アイデア結婚式”。

「バースデー・ウェディング」は、大安仏滅はもう古いとばかりにホテル後樂園が考え出したもので、誕生日に挙式、出席者 30 人で 5 万円。9 日午後 1 時から実験会を開く。

田園調布・やまのべもここウェディング研究室では“子に贈る結婚式”なるものを考え出した。ねらいは、戦争やかけおちなどの事情で式を挙げられなかった中年夫婦。5 月 5 日子どもの日に、子どもの前で改めて…というわけで、こちらもパーティーとも 5 万円。

このほかにも、新作ミュージカル映画の封切り PR をかねた“劇場結婚式”が 9 日、日比谷・スカラ座で行なわれるなど、神聖なる儀式もいよいよ商魂にふり回されてきた感じである。

⇒参照：(毎日 193) 1968 年 4 月 6 日付 子供に贈る結婚式—挙式できなかった親達が

(朝日 189) 1969 年 4 月 27 日付 パパとママ 結婚式をどうぞ…

記事抜粋：1968 年 8 月 29 日付 (朝日 175)

最近の結婚式で特に目立つ傾向は、参列者数がずっとふえてきていることだ。10 年ほど前は、15 人から 20 人見当が一番多かったが、ここ数年は 40 - 50 人は当り前、100 人を超えるものも少なくない。ただし、参列者一人当りの“単価”はたいして高まらず、一流会館、ホテルでの有名人の場合は別として、特に豪華なのは少ないという。

結婚式場協議会のアンケート調査によると、今年上半期に式を挙げた 746 組のうち、参列人数 30 人が 27.8%、40 人が 24.3%、50 人が 17.8%で、20 人がわずか 4.7%、25 人も 4.2%にすぎない。

また、参列者一人当たりの費用（挙式、貸衣装、披露宴、引出物、写真など一切を含む）は、3,500 - 4,000 円が最も多くて 28.1%、ついで 4,500 - 5,000 円が 18.9%、3,000 - 3,500 円が 14.2%の順で、あとは 7%以下。

都内だけで（式場は）約 200 におよび、さらに 2、3 年のうちに約 20 式場がふえそうだという。したがって、民営式場の競争は激しい。パッケージとって「30 人で 7 万円」の打切りや、新婚旅行の宿泊第 1 日分をサービスしたり、抽選で土地つき住宅、ハワイ旅行、あるいは乗用車一台を贈るといったものも現われたが、これは過当景品ということで、公取委から横やりが入った例もある。

⇒参照：(読売 1776) 1968 年 4 月 17 日 恋愛組ふえる 今春・結婚式の傾向 初めて 70% 越える

(読売 1786) 1968 年 5 月 5 日 結婚式場“お熱い競争” 景品に家や車つき

記事抜粋：1969 年 4 月 21 日付 (朝日 188)

春の結婚シーズンはたけなわだが、結婚式場業界の表情は意外にきびしく“戦国時代”だという。公営、組合系の豪華な式場付会館がぞくぞく建てられる半面、民間の式場が相次いで“討死”している。一方、利用者側もなかなか簡素化に踏切れず、年々費用はかさ

み、いたずらに業界の競争に油を注ぐ結果になっている。

ベビーブーム時代に生れた男子がことしあたりから適齢期に達する。だが式場は都内にざっと 150。すでに過当競争気味だという。去年の秋からことしの 3 月までに民間の 5 つほどの式場がつぶれたり、他の業種へ転身した。原因の一つに公営、組合系の式場に客をとられたことが上げられ、討死まではしなくとも経営不振にあえいでいる民間業者もかなりの数になっているようだ。

共済組合などの団体の式場は九段会館（遺族会）葵会館（専売公社弘済会）東京農林年金会館（農林年金福祉団）市ヶ谷会館（防衛庁共済組合）など既設のものも多いのに、さらにどんどんふえる。結婚調査センターの調べでは、式場付会館を建設中、あるいは建設が決まったものには全国旅館組合、全国公立学校教職員組合、国鉄共済組合、全国労働団体などがある。いずれも会員、組合員の福祉厚生が目的で、会議室、宿泊施設などとともに結婚式場も設け「余裕があれば一般にも開放する」のが通例だ。

会員を何千、何万と持っているうえ、豪華な高層建築なので、デラックスムードにひかれた一般の利用者までどんどん吸収する。これからは公営・組合系同士で競争が激しくなるだろうという。

式場間の競争で利用者が安い費用で挙式できればよいのだが、実際には年々、費用がかさんでいる。結婚調査センターが昨年秋からの挙式組 1428 組を調べたところ、参列者一人当りの費用は 4,600 円から 5,000 円をという結婚式（挙式と披露宴）が全体の約 27%で、最も多かった。

式場選びに頭を悩ませる若いカップルは多いが「簡素に」と考える人は意外に少なく「豪華なムードで、できるだけ安く」がほとんどだ。「神前」ならぬ「人前」結婚式を長年実施して、費用の一番安い新宿生活館は毎月約 6 割しか埋まらない。「値上げをしてもデラックスにし、利用者をふやすべきか」内部で激論が交わされ、一応「あくまで初心を貫き孤高を保つ」ことになったが、世の中のデラックス化で再検討を強いられている状況だという。

記事抜粋：1969 年 9 月 16 日付（毎日 215）

カップルで式場めぐり 業者の PR 作戦

ゴールイン間近のカップルを乗せ、バスで都内の式場をぐるぐる回る“走る結婚ライブラリー”がうけにうけている。式場案内はもちろん、模擬結婚式や医学講座までつけた至れり尽くせりのサービス。お値段はタダというので、週に一度の定期便には希望者がワンサと押しかけ、今月分は予約満員お断りの盛況だ。

⇒参照：(毎日 213) 1969 年 8 月 10 日 衣・食・住：まちかど＝結婚式場が夏枯れに新手戦術

(読売 2071) 1969 年 9 月 3 日 結婚式観覧バス ご繁盛 主導権握る女性

【1970 - 1974 年】（昭和 45 - 49 年）

結婚ラッシュ 式場乱立で次々転廃業 会費制は一時的ブーム

- ◆官公庁の外郭団体系結婚式場が続々誕生、デラックスな設備と安い費用で大盛況
- ◆結婚式場乱立のあおりをうけた民間式場の転廃業
- ◆会費制“ワリカン結婚式”が流行するも、ほどなく影をひそめる
- ◆アイデア結婚式いろいろ ——やまのべもとこの活躍, PR イベントもあれこれ
- ◆豪華一流ホテル組（結婚費用 200 万円超）の増加 ——親の見栄+お利口さん型ヤング
- ◆結婚式は派手になるも費用を抑え、新婚旅行をデラックスにという傾向が現われる

記事抜粋：1970 年 8 月 23 日付（読売 2256）

ここ数年都内に林立した民営、官公庁、組合系の式場が、あちこちで過密状態になり、ついにこの夏場の閑散期を乗り切れずに転廃業を決める所が目立ってきた。乱立に加えて「式は普通に、旅行と新生活を豪華に」という最近の傾向も打撃を与えたようだ。

現在、都内の式場は約 200 ヶ所。申し出があればという料飲店を含めると、500 ヶ所にのぼると推定され、5 年前の 2 倍にふえている。春秋の吉日と休日にだけ集中する予約。大企業では、モーレツ社員たちがウィークデーに参列するのをきらう所もあって、式場経営のアンバランスは当分避けられそうもない。

記事抜粋：1971 年 8 月 3 日付（朝日 219）

終戦後のベビーブームっ子の結婚ラッシュに乗って、官公庁の外郭団体系の結婚式場が続々誕生、しかも人気を集めている。デラックスな設備と安い費用がうけている理由。このあおりをまともうけているのが民間の結婚式場。閉鎖したり、商売替えが、昨年あたりから目立ちだした。

都内にある結婚式場は約 200。このうち官公庁の外郭団体が経営する会館と郡、区など公立会館の式場がそれぞれ 25 ずつ。あとがホテルなどの民間式場。結婚式場協議会の調べでは、都内の式場の数は 5 年前とほとんど変わらないが、公共団体系、公立の数はほぼ 2 倍の増。ことにここ 2、3 年は公共団体系の伸びが目ざましい。その分だけ、民間の式場が姿を消している、という。

「場所を貸すだけで、写真屋、料理屋、貸衣装屋、花屋、引出物屋などさまざまな業者から手数料がはいる。公共団体系の会館としては、欠かせない収入源になっている。結婚式場であげた利益をビル建設の借入金の返済にあてているところが少なくない」と同協議会。

公共団体系の式場で行なわれる結婚式は、昔ながらの家中心のものは数えるほどで、ほとんどが友人を主体に、会費制の“ワリカン結婚式”。青年たちのこのような結婚式に遅れをとったのが、民間の式場。ここ 2 年間で合わせて 10 館が結婚ラッシュを前に閉鎖した。

記事抜粋：1972年8月23日付（朝日 2533）

戦後のベビーブームのピークは昭和24年。ということは、それから23年目の今年はマリッジブームとなるわけで、適齢期のお嬢さんたちも必死なら、業界も天下分け目の関ヶ原というところ。秋の結婚シーズンへ向けて、**あの手この手のアイデア合戦**が繰りひろげられている。かつての家と家との結婚式はかげをひそめ、若者本位の結婚式へ、さらに最近**は「こどもが決め、友だちを中心に、共払いです」“三とも結婚式”時代**だそうで、神前、仏前、キリスト教式に代わって、“人前結婚式”が中心。**式そのものは次第にショー的なものになる傾向**があり、オリンピックからヒントを得た聖火結婚式や、生演奏がはいる音楽結婚式、式代がタダで出演料までもらえるテレビ結婚式とさまざま。値段の方も、1億円の豪華なものから夏季割引3万円コース、なかには挙式料しめて320円という超廉価版までバラエティーに事欠かないが、**全般に式や披露宴を安上がりにして、新婚旅行をデラックスにしようという傾向が目立つ。**

記事抜粋：1972年9月18日付（朝日 234）

以前の結婚式は宴会型だった。親類、縁者が大勢集まり、料理に金をかけた。一人当たり1万円以上の特別料理の注文が多かった。地方ほどその色彩が強かった。**今はほとんどが会合型。親類よりも友人の方が多い。**料理にかける金も客一人当たり2,000 - 3,000円というのが多い。式、披露宴、引出物、写真など一切を含めて一人当たり6,000 - 7,000円。それでも高い、と**2,000円程度の会費を持寄っての友だち結婚式もふえている。**衣装だけは前より金をかける。カラー写真の普及で、最近**は男女とも和服、花嫁は打ちかけを着るのも目立つ。**

「これではもうからない」と東京・都心のあるホテルは、結婚式のほかに、法事も引き受けはじめた。またある別のホテルでは「**お2人だけの結婚式**」を売出した。参列者なしというわけだが、申込みが殺到しているという。残った業者は巻き返しに必死だ。

東京・九段会館の場合——遺族会が経営し、そのうえ靖国神社も近くて、神式の式場、というイメージが強いが、来年1月からキリスト教も導入することにした。「**最近、チャペルへのあこがれが強**く、神式に疑問をもつ若者がふえた。それに神式ばかりだと、大安の日などは大入り満員だが、仏滅の日などはガラガラ、ということになって」と、同会館は“変身”の事情を打ち明けている。

⇒参照：(朝日 258) 1974年10月22日 結婚式 カルロス・マルティネス神父

軽井沢カトリック教会では、1972年(昭和47)に西郷輝彦と辺見マリの挙式があつてから週刊誌を通じてその名が知られ、若い女性のあこがれの“聖地”となる。

記事抜粋：1974年10月2日付（朝日 256）

結婚調査センターの分析によると、戦後ベビーブームといわれた22-27年の中でも頂点だ

った24年生まれが269万人いる。ここ数年の結婚年齢は男25,6歳、女23歳。一昨年は24年生まれの女性が23歳となり記録的な結婚ラッシュを呼んだが、ことしはちょうど男性が25歳になるので、その裏返し現象になるだろうという。

毎年、結婚式の半数以上は秋に集中する。全国的に半年前からの予約が普通で、日曜日を選ぶ場合、来年の春から秋までの申し込みが続出している。傾向として、どこでも日曜が好まれ、次いで祝日、土曜の午後。大安のウィークデーより仏滅の日曜の方が人気のマト。日曜が第一条件となった理由として、同センターでは参加者が昔は親の関係者が多かったのに比べ、いまは当事者中心となったため。職場の休日でなければ参加者が困るので、無理しても日曜を選ぶ。

ひところ流行した会費制の結婚式は、北海道を除いてすっかり影をひそめた感じ。結婚式費用は、参加者一人当たり9,400円。昨年が6,700円だから40%の上昇。インフレ、諸物価値上がりが大きく反映しているようだ。

洋装より和装を希望する者が全体の56%に及んでいる。

記事抜粋：1974年12月16日付（朝日259）

結婚式場相談センターの話では、都内でことし一年間に誕生したカップルは12万組。このうち、式を挙げない30-40%を除いて、あとはそれぞれの形式で挙式しているという。その内訳をみると、伝統を誇る民営の結婚式場がやはりトップで40%、次いで一流ホテルの約25%、公共施設の22-23%、神社の約10%などの比率になっている。

ここで目をひくのは1万7000-8000組にのぼる一流ホテル組。「この3年間に5-10%はふえた」「ホテルでの式、披露宴、引出物の総額の平均は150万から170万円。これに新婚旅行などの諸経費を加えると、200万円を超える」

「この業界は“意地のマーケット”と呼ばれるが、ずばり親の見えが要因。それに、職場の上司や学校の先輩に出席してもらうことで、人脈や学閥の中に自分を位置づける効果をねらうヤングがふえているのも事実。体制志向型とか、お利口さん型のヤングがかなりの比重をしめてきているあらわれではないか」

記事抜粋：1974年12月26日付（読売2752）

結婚式場協議会の結婚調査センターによる結婚式の実態調査報告

結婚式：披露宴の出席者は平均が約50人。一人当たりの費用は10,270円とはじめて1万円の大台を超えた。式服は「男女とも和装」が55.2%で、男の世界にも和服ブームが起きている現われ。

新婚旅行：4泊5日と5泊6日が全体の半分。平均費用も36万5600円と48年春の調査(19万3600円)に比べて約2倍。しかも行き先は34%が海外、以下北海道17.6%、九州14.3%。

【1975 - 1979 年】（昭和 50 - 54 年）

型通りの披露宴で“世間並み”意識 結婚件数の減少・費用の増加

- ◆物価上昇を反映して、デラックスホテルより公共・公立式場が人気に（1975 年）
- ◆神前結婚で、頼まれ仲人を立てて、型通りの披露宴 ⇒結婚式の平均化
- ◆結婚式は“無難に”“世間並み”の式を… 新婚旅行は豪華に… ⇒式より旅行を重視
- ◆新郎のお色直しが普及
- ◆団塊世代の結婚ラッシュが終わり、結婚件数が減少。式場の淘汰・減少
- ◆参列者の増加。式の規模が大きくなり、さまざまな演出が登場

記事抜粋：1975 年 3 月 6 日付（読売 2767）

「不合理だ」「中身がない」といわれながらも、結婚式のパターンは変わらないが、それでも昨今のインフレに悲鳴をあげて、“生活防衛型”の挙式も目立っている。

大半は神前結婚で、頼まれ仲人を立てて型通りの披露宴。中には二人だけの結婚式や海外の教会での挙式などもあるが、それも業者の既製の“商品”として売り出しているものが多い。

「その辺むずかしいところですが、式場のマスプロに乗った方が安上がりですむ。それに、親の立場、仲人や会社の上司のことを考えると、無理に自分たちの個性を出すより、無難にやった方がトクだという実利的な考えが、若い人の間に多い」と結婚調査センター所長の五百木文二さんはいう。

ひところ、若者中心の会費制結婚式が流行したが、最近はずっかり下火。会費制だと安っぽく見えるという意識も強いが、挙式側の収支を考えると、招宴の方が割に合うという計算もあるようだ。会費制だと、3,000 円程度で、それ以上出せる人もしばってしまう。招宴なら、祝い金の相場は 5,000 円。多い人なら 1 万円、2 万円と出すからだ。

「いまの若いカップルは、古い形の式を打ち破ろうという熱意もないかわりに、式をそれほど重視しているわけでもない。むしろ、中心は旅行です。だから、一応、世間並みの式はあげたいが、費用は安くというのが平均的な考えです。それを反映して、2, 3 年前まで、デラックスなホテルが人気を集めていたのに、最近公共や公立の式場など安いところへどんどん流れていきます」と五百木さん。

記事抜粋：1975 年 5 月 5 日付（毎日 311）

諸物価値上がりのなかで、安上がりの「区営結婚式場」が、若者に大もてだ。

足立区東部区民福祉センターの阿部俊夫事業係長は「ホテルなどのデラックス結婚式が一時はやったが、最近結婚式に金をかけるより新婚旅行を豪華に楽しむ若者が多い。物価高騰で結婚式費用も高くなったので、安い区営式場が見直されているようだ」という。

記事抜粋：1975年10月3日付（朝日271）

結婚式は、ひところ、会費制の友人だけのパーティー形式や、欧米風の教会での挙式などがはやったが、いまは専門の式場やホテルでやるのが普通になった。披露宴も派手になる一方で、招待者の人数も多くなったし、一人当たりの費用も1万円から2万円はかける。近ごろは、花嫁ばかりでなく、新郎の「お色直し」まであるそうだ。

記事抜粋：1976年2月12日付（朝日273）

三和銀行が昨年、結婚一年未満の夫婦について調査した「挙式前後の出納簿」によれば、結婚に要した費用の総額は平均254万6,000円、前年より25%と大幅に増え、年々豪華になる様子が見える。これには、結納や住居などの費用は含まれていない。このうち、親の負担したのは、夫側が70万2,000円、妻側が110万4,000円。ほとんど親の“結婚式”といっているくらいだ。しかも回答者の86.3%は、結納も交わしていた。

2、3年前から、新郎が新婦のお色直しに合わせ、紋服からタキシードに着替えたり、ロウソクをささげて入場、火をともしという演出にこったりするぐらいが、若者らしいという。友人だけを集めてやりたかったのに、親の意向でホテルで披露宴になった、会費制でしかなかったが、職場が形式的で、将来のことも考えて派手になったとか、後悔している若夫婦も多い。先の銀行調査でも3割が挙式前後の費用はもっとおさえるべきだったと答え、とくに挙式、披露宴のかかりすぎを指摘していたという。

記事抜粋：1976年2月24日付（朝日274）

年間挙式5000組、日本一の実績を持つ明治記念館が今年から、14室あった披露室を13室に減らし、その分だけ部屋を広くした。出席者が年々増えるためである。人数が増えれば、一組当たりの必要時間も伸びる。平均2時間10分だったのを今年は2時間2、30分と見込んでいる。

結婚式場協議会本部長の紀村武男さんの話だと、5、6年前にはやった二人だけの結婚式が最近はめっきり下火になったという。

記事抜粋：1976年3月21日付（読売2872）

終戦後の“ベビーブーム”に生まれた人たちの結婚ラッシュは47年の110万組がピーク。その後は少しずつ減って、昨年は100万の大台を割って93万4000組（厚生省推計）。結婚が少なくなるにつれて、披露宴は豪華絢爛になり、費用をかけるようになってきた。親がかりとなれば、披露宴や支度が派手になってしまう。ご二人じゃなくて両家の“祭典”になってしまう。最初は双方の親が「簡潔にやりましょう」で意見一致しているのだが、式が近づくにつれ、エスカレートしてくる。

記事抜粋：1976年10月14日付（毎日327）

デパートなどに案内所を設けて結婚式場にカップルを送り込んでいる“式場あっせん業者”の無秩序ぶりが、このところ目立っている。戦後ベビーブーム時代の人たちの結婚ラッシュがようやく峠を過ぎ、この2、3年、結婚カップルは減少気味。そこで一組でも多くカップルを獲得しようとする式場側の弱みにつけ込んで、式場紹介業者は式場に対してリベートを要求する。また「予約手数料不要」としながらも、実際は利用者から手数料を取る業者もいる。

最近、首都圏の式場業者約80社が集まって「全国結婚式場協会」を発足させ、客からの苦情に対処するための「結婚式に関する苦情110番」を開設したところ、9月1ヵ月間で97件の苦情が飛び込んだ。式場側では、改めて苦情の多さに驚き、今後あらゆる形でブライダル産業内部の明朗化をはかっていくという。

⇒参照：（読売2891）1976年7月22日 結婚式を明るく－81社が団結

（読売2916）1976年12月14日 過当競争の結婚式場 トラブルふえてます

記事抜粋：1977年3月6日付（毎日335）

最近の結婚式にはこれまでと違った特徴が出てきている。そこで、千代田区平河町の結婚式場マツヤサロンの調査データから新しい傾向をさぐってみた。

〈男性28.4歳、女性25.5歳〉昨年一年間に同式場で挙式したカップル708組の平均年齢。女性の結婚年齢がやや高くなってきた。

〈和高洋低〉披露宴の料理は現在、洋食53%、和食45%、立食形式2%で、相変わらず洋食が過半数。しかしオープン当時、洋食が90%を占めていたことを考えると、洋食の人気はかなり落ち、逆に和食のそれが高まっている。値段が同じものを見比べると、和食の方が若干見劣りする。それにもかかわらず、和食のパーセンテージが高くなってきているのは、招待者が増加するにつれて、おじいちゃん、おばあちゃんなどいなかからの出席者もふえてきていることと、洋食が珍しい食事でなくなったことなどがあげられている。

〈相合いガサで登場〉披露宴にいろいろこった演出を考えるカップルが多くなっている。お色直しの後のメモリアルキャンドルなどは、すでに一般化。最近ではカップルが相合いガサで登場したり両家の家紋入りの提灯を持って、長持唄で入場といった新手も。バックグラウンドミュージックとしては、エレクトーンの人気が高く、エレクトーンのない披露宴なんて……というほど。

〈男性のお色直しも当たり前〉披露宴での男性のお色直しがここ2、3年でふえ続け、最近では10人のうち9人までが、紋付から白のタキシードに着替えるとか。それもほとんどが貸衣装だが、借料の方は1万円ほどで、花嫁衣装に比べるとかなり安い。

〈費用の平均85万円〉

招待客の人数は平均60人で、年々増える傾向にある。

記事抜粋：1977年3月12日付（毎日337）

〈挙式・披露宴〉平均82万9000（三和銀行「挙式前後の出納簿」）だが、結婚問題研究所の調査では「100万円」という層が最も多く27.4%、次いで「50万円」の21.2%。招待客は平均52.8人。傾向として年々大規模化しつつあるようだ。一人当たりの費用は1万5,198円で昨年より約4,000円アップ。ベビーブームっ子の結婚ラッシュが続いた48年の平均が6,703円だから、この5年間に2,3倍も高くなったことになる。

〈新婚旅行〉運賃値上げのはね返りもあって、平均費用は46万4,583円と昨年比で22%の伸び。行き先別にみるとトップはハワイ（26.1%）、次いで北海道（16.3%）、グアム・九州（各13.1%）、京都、タヒチなどの順になった。昨年1位の北海道に代わって、同3位のハワイが人気を集めたが、**海外組が国内組を押えたのも初めて**。

〈総額は…〉仲人謝礼や婚約指輪代など雑費を加え、しめて平均292万5,000円（結納金、住宅費を除く）となる。負担の割合は夫と妻がほぼ折半。費用の工面は二人の預貯金のほか、夫の親が88万1,000円、妻の親が126万3,000円を出している。

記事抜粋：1977年4月13日付（朝日289）

人気定着「結婚式も海外で」 型通りの式 - 披露宴よりもわずらわしくなく安上がり

記事抜粋：1977年6月10日付（毎日342）

結婚式の件数はここ3年、低落を続け、49年当時年間100万組あったのが今年は85万組まで落ち、さらに来年以降も5,6年は減少し続けるとみられる。この理由は至って単純で、24年に270万人も生まれ、ピークに達したベビーブーム世代の結婚がほぼ終わったためだ。戦後の産児制限は極端で、32年には157万人のベビーしか生まれなかったから、この世代が結婚する3,4年後は式場も閑古鳥が泣くと予想される。

そこで四苦八苦しているのがホテルや結婚式場だ。昨年は東京の**社会保険会館が式場を閉鎖**、**三福会館が東京海洋会館に代替わり**したり、**ウェディングホールも今年経営者が交代する**など業界は不況風にさらされている。これに輪をかけるのは新規進出組の多いことだ。公共団体の建物がグッと本格的式場の体裁を整えたり、今年登場した東京の**神田教育会館**のように一般式場も顔負けの設備を備えたり、地方ではボウリング場が式場にクラ替えする例もあるという。また、**第三次ブームといわれるホテル建設ラッシュも業界には頭の痛い問題だ**。

しかし、捨てる神あれば拾う神ありで、業界にとってわずかな救いとなっているのは式の規模が年々豪華になっていることだ。「最近招待者70-80人が普通で昨年より20人くらい多くなっている」（明治記念館）「一人1万5,000円から2万円もかけるようになり、数年前より5,000円前後あがった」（雅叙園観光）という。**結婚件数の低下を式の豪華さがやっとならばカバーしている**といったところだ。

【1980 - 1984 年】（昭和 55 - 59 年）

公営結婚式場の閉鎖あいつぐ 「豪華に…」の親心で費用増大

- ◆公営結婚式場が利用者激減で閉鎖あいつぐ
- ◆適齢期人口の減少（23区：昭和46年は11万4,983組、昭和56年は6万4,953組）
- ◆一般式場の標準：参列者数70人で174万円（国民生活センター調べ）
- ◆ドライアイス（ミストフラワー）はもはや定番

記事抜粋：1980年8月2日付（読売3197）

婚姻数は年々減るばかりで、人集めに四苦八苦の式場が少なくない。式場業者が黙っていても客が繰り込む時代は終わり、サービス合戦の火花があちこちで散っている。

そのなかで目玉になっているのは、挙式、披露宴、さらにハネムーンまで一まとめにしたパック商品。“40名様38万円”“ハワイへのハネムーン付き74万8,000円”。結婚式は美辞麗句を並べたイメージが大切にされてきたが、金額が赤字で印刷され、スーパーのチラシと変わらない。ここにもバーゲンの波が押し寄せていることをうかがわせる。

記事抜粋：1981年2月4日付（毎日382）

“安い式場”として住民サービスを続けてきた世田谷区民会館結婚式場が、このシーズンを最後に、5月いっぱいまで廃止されることになった。利用者が激減し、その使命を終えた、というのが理由。とどまるどころのない物価高の中、結婚式、披露宴は年々豪華になっていく昨今の世相を映してのことだろうか。「不透明な先行き、せめていつときを豪華に、ということなんでしょうね……」と同館職員らは複雑な面持ちで名残を惜しんでいる。似たような傾向は他の区営式場にも現われており、同区では、式場跡を住民集会室などに改装することを検討している。

⇒参照：（朝日340）1981年4月14日 参った区営結婚式場 豪華ばやり、閉鎖相次ぐ

記事抜粋：1982年9月18日付（読売3359）

（三和銀行「挙式前後の出納簿」によれば）挙式は90%が神前、披露宴出席者数の平均は66.7人。いずれも一般式場がおよそ42%、ホテルが31%、衣装、引き出物、写真代、招待状などを含めた挙式・披露宴の費用は平均170.4万円となっている。

結納（57.6万円）、婚約記念品（夫38.4万円、妻6.1万円）、新婚旅行（84.9万円）、家具・家電製品・生活必需品等（159万円）、これら総費用は、しめて平均620万円。夫婦の負担の割合は、夫56%で347万円、妻44%で273万円。資金の捻出方法は、両親からの援助が夫129.4万円、妻170.5万円。貯蓄額は夫、妻とも280万円前後もありながら、結婚費用は“親がかり”の実態を表している。

記事抜粋：1982年11月12日付（朝日377）

東京都内の結婚式場や宴会場が自分のところに入りする貸衣装業者以外の業者からの花嫁衣裳などの持ち込みを制限したり、高い「持ち込み料」を取ったりする例が増えているが、公正取引委員会は、こうした商法は「不当な抱き合わせ販売」を禁じている独占禁止法に違反する疑いが強い、として、調査を進めている。結婚式は年々華やかに、費用はふくらむばかりだが、こうした商法は、人生一度の「華燭（かしよく）の典」を食う悪乗り商法として批判を浴びそうだ。

⇒参照：(朝日 390) 1983年4月27日 婚礼衣装持ち込み料 適切な表示しなさい 公取委

(読売 3486) 1984年3月31日 結婚式場の悪質商法 いぜん高い持ち込み料

記事抜粋：1983年5月12日付（毎日455）

ジューン・ブライド（6月の花嫁）の季節を前に、都内の結婚式場は予約でいっぱいだが、かつて簡素を売り物に人気のあった区営の結婚式場はこのところサッパリ。ベビーブームっ子たちの適齢期が去り、一人っ子花嫁が増えていることから「せめて結婚式は精いっぱい」と親たちがホテルなどを選んでいるためという。「時の流れにはさからえず」と区によっては敬老館や児童館への転用を検討しているところが目立つ。

予約が減った原因について関係者はまず適齢期人口の減少傾向をあげる。都の調べによると、23区内で56年一年間に6万4953組のカップルが誕生したが、10年前の46年に11万4983組あったのに比べるとざっと5万組の減。区営の式場の多くは、かつてベビーブームの世代の需要にこたえる目的で作られたいきさつがある。

さらに一人っ子家庭が増えたことも「影響している」という。「双方の両親ともたった一回の晴れの日だから精いっぱい思い出になるように、ということで“質素で簡便”を嫌う傾向」という。

⇒参照：(毎日 477) 1984年11月27日 区政・市政：豊島区立結婚式場閉館

(読売 3668) 1987年5月24日 節約披露宴なんてダサイ!? 消える公営結婚式場

記事抜粋：1984年4月11日付（毎日467）

（国民生活センターの調査）東京で中程度の結婚式場で挙式、70人の参列者を迎えて披露宴を行った場合…式の総費用は約174万円。一人当たり2万5,000円弱になる。

式服はうちかけと紋付き。途中、花嫁は振袖とドレスに、花婿はタキシードにお色直し。もちろん、いずれも貸衣装。演出はミストフラワー（ドライアイスの霧を流すもの）、エレクローン（演奏者付き）、キャンドルサービスの3つ。標準的サービスと価格をとった。今回の調査で平均額をみると、①ホテル約200万円、②一般式場約160万円、③共済施設約130万円、④公共・公営施設約120万円。100万円未満は④公共・公営で約4割、②一

般式場、③共済で1割強にすぎず、①ホテルではゼロだった。

【1985 - 1989年】(昭和60 - 64年/平成元年)

「世間並みに…」結婚式にお金をかけ、ゴンドラに乗る新郎新婦

- ◆披露宴のショーアップきわまる(玉姫殿グループの急成長)
- ◆ホテル、式場に礼拝堂建設ブーム。披露宴のショー化⇒式もファッションで選ぶ
- ◆「知人との釣り合いを考えて」世間並みに…と、参列者100人を超える披露宴が一般化
- ◆結婚予備軍の披露宴離れ 女子学生・OLの4人に1人が「披露宴はやりたくない」(1989)

記事抜粋：1985年7月11日付(朝日)

白鳥の形をしたゴンドラが、高い天井から降りてくる。ゴンドラについて「天使の翼」がはばたいている。スポットライトの中に、挙式したばかりの二人がぽっかり浮かぶ。新郎は白手袋を振り、新婦はほほえんでいる。

「風と共に去りぬ」の曲が流れ、証明が色鮮やかに筋を引く。ドライアイスの白煙が渦となり滝となる。「ファンタジア」と呼ばれるこの演出で、ドライアイス40kgが煙と消えた。

「冠婚葬祭互助会」が経営する専門結婚式場の玉姫殿グループが、いま急成長している。今年はまだ豊中、前橋、差が、松戸など6つが開き、年末までに仙台、八王子、和歌山、新庄など8店が、さらにできる。

17年前に第一号の京都玉姫殿が生まれて以来、おととしまでで52店。それが去年で60、今年で74店に伸びた。あと10年で120店にするのが目標だ。

「奇抜過ぎる」「厳粛さに欠ける」など、業界の古参たちのやっかみをしりめに、去年は約3万2000組が玉姫殿で式を挙げた。この年結婚した人たちの約20組に1組を占めている。どこも趣向をこらす。ちょんまげのかつらを貸し、殿様とお姫様の格好をさせる玉姫殿がある。東京オリンピックの聖火リレーのとき分火しておいたという火を、キャンドルサービスの火種に使う玉姫殿もある。

記事抜粋：1986年4月25日付(朝日439)

三和銀行は毎年9月に1年以内に結婚したカップル約500組を対象に結婚に伴う出費を調べている。うち挙式・披露宴にかかった費用の平均の推移をみると、昭和50年79万円、52年94万円、54年115万円、56年159万円、58年171万円、60年197万円。10年間に2倍以上という伸び。昨年(1985年)の調査では100万円未満はわずか10.6%。

記事抜粋：1986年5月31日付(朝日441)

ホテルや結婚式場で、キリスト教の礼拝堂をつくる場所が増えている。ウエディングドレスを着て、ヴァージンロードを歩く形式が乙女をひきつけるらしい。披露宴のショー化

が言われて久しいが、式そのものもファッションで選ぶ時代になりつつある。

こうした流行について、式場あっせん業界の大手、結婚式場相談センターの青木辰夫専務は「キリスト教式で挙げるのは、今は17-18%、10年前はせいぜい5%前後だった。今後、さらに増えそう。キリスト教式といっても宗教意識はない。結婚式といえば、打掛よりもウェディングドレスを思い浮かべる若者が増えているのは確か。親は抵抗があるようだが、本人たちが強く希望して、結局、折れてしまうようです」と見ている。

結婚式場経営相談会社の結婚問題研究所の佐々木寛所長は「披露宴は派手になっても、式自体は儀式なので保守的な面が強く、まだ神前が多い。しかし、そこにもここ数年、洋風化の波が目立ってきた。親族だけが出席する神前式に対して、教会式なら友人も式に参加できる点が、若者を引きつけている大きな要素でしょう」と説明する。

⇒参照：(朝日 435) 1986年3月15日 “教会風” 結婚式 ホテルでもOK

(毎日 498) 1986.09.01 婦人・子供：ヤングに人気、教会での結婚式

(読売 3694) 1988.05.13 [近ごろの結婚式・お葬式] = 1 若者の意識多様化

(朝日 495) 1988年10月31日 結婚式__日常の記号

記事抜粋：1987年5月14日付 (朝日 473)

ふるさとづくり運動などを進めている財団法人あしたの日本を創る協会はこのほど、全国の新婚カップルと、一般市民を対象に「結婚式の実態と世論調査」をした。結果を見ると、**簡素化を望みながらも、「世間並み」という強い枠を打ち破れず、ついつい派手になってしまいう最近の結婚式事情**が、見事に浮き彫りにされている。

披露宴の招待客数は、「50人以下」5%、「50~99人」44%で、「**100人以上**」の大型の式が、**なんと50%**。それでは、どうやって呼ぶ人数と範囲を決めたかという、「知人との釣り合いを考えて」という世間並み志向が54%で、一番多かった。

式の演出については、「キャンドルサービス」と「ケーキ入刀」は、**9割以上の人**が経験している。このほか、最近はやっている「ビデオ撮影」が77%、「ドライアイス」が50%、と披露宴が完全にショー化していることがわかる。

さらに、司会については、**プロに頼むカップルが4割に達している**ことも驚きのひとつ。披露宴の大型化で、友人などアマチュアの司会では、とてもまかない切れないう状況になっているのかもしれない。

最近の結婚式のあり方については、「親の希望をかなえる」「簡素な式で門出を」「業者に従い労力節約」「業者に従い人並みの式を」などの意見が上位を占めた。規模の面での調査結果と照らし合わせると、一般論としては簡素化が望ましいと考えながらも、いざ当事者になってみると、親もメンツなどもあって、業者をお願いして世間並みの式を挙げた、という本音と建前の苦しい使い分けがうかがえる。

記事抜粋：1988年5月14日付（読売 3695）

美食ブームを反映して「費用はかかってもおいしいものを」と1ランク上の料理を注文する客が、どこのホテル、式場でも増えているという。

三和銀行では毎年、「挙式前後の出納簿」として、新婚夫婦の調査を行っている。昨年の調査（対象 440 組）で初めて、ホテルで挙式した人（38%）が一般式場（32%）を追い越した。挙式・披露宴にかかった費用は平均 250 万円だったが、ホテル利用者だけをみると 300 万円と極端に高い。

値段は高くても、雰囲気やイメージの良い商品を選ぶ。これが近ごろの若者の消費行動。結婚式も例外ではない。

記事抜粋：1988年5月17日付（読売 3696）

「テレビのお笑い番組とかで玉姫殿っていうと、ワツとなる。いやあ、有名になってしまって」と苦笑いするのは、武蔵野玉姫殿副社長の武田七郎さん。互助会系結婚式場の玉姫殿グループは、大掛かりな演出や装置で知られ、全国で 80 店舗余りある。

「昭和 37, 8 年生れが、いま結婚する人の中心。このテレビ世代はマイクを握ること、自分がスターになることに少しも抵抗がない。むしろそうしたがるんです」と武田さん。

記事抜粋：1988年5月18日付（読売 3697）

読売新聞社が 2200 人を対象に、この 3 月実施した全国世論調査によれば、最近の結婚式について「派手すぎる」「どちらかといえば派手」とみている人は全体の 94%。そして「もっと簡素にしても人生の門出を祝う方法はあるはずだ」と答えた人は 91%いた。

最近都市部では、流行のレストランなどを借り切って、披露宴代わりのパーティーを開くカップルが目立ってきた。「簡素化」かどうかはともかく、少なくとも「多様化」の動きは出てきているようだ。

記事抜粋：1989年3月10日付（朝日 501）

「こんな結婚式がしたい」という調査をしたのは、東京ビューティーセンター。首都圏の女子学生と OL、593 人から希望などを聞いている。

それによると、「自分の結婚式で絶対やってみたい演出」は、「キャンドルサービス」と答えた人が最も多く 23.3%。これに、「花束贈呈」13.3%、「BGM の選曲」10.8%が続く。中には、「お父さんを泣かせる」という答えもあった。

反対に「絶対やりたくない演出」では、「ゴンドラでの入場」32.5%が断然トップで、続く「ドライアイス・スモーク」16.8%や、「相合傘」7.1%を大きく上回った。

ただ、これらの答えのほかに、経済的な理由からか、マンネリ化した演出を嫌ったためか、「披露宴はやりたくない」と考えている人が 27.3%、4 人に 1 人もいた。